

トルコ語指示詞の文脈指示用法について\*  
 一文照応形としての *bu, o* の用法一

バルプナル、メティン  
 (岡山大学大学院社会文化科学研究科)

1 はじめに

現代トルコ語には、近称(*bu*)、中称(*şu*)、遠称(*o*)と呼ばれる3系列の指示詞がある。従来、表1で示された指示詞は、指示詞語幹 *bu-*、*şu-*、*o-*からの派生形とされており、指示形容詞(*bu, şu, o; böyle, şöyle, öyle; bunca, şunca, onca*)と指示代名詞(*bu, şu, o; bura, şura, ora; burası, şurası, orası*)の2種類に分けて区別されている。

表1 トルコ語の指示詞

	<b>bu-</b>	<b>şu-</b>	<b>o-</b>	
<b>-ra, -rası</b>	bura/burası	şura/şurası	ora/orası	場所
<b>-(y)le</b>	böyle	şöyle	öyle	性状
<b>-(n)ca</b>	bunca	şunca	onca	量
<b>-</b>	bu	şu	o	もの・人

(バルプナル 2010b:9)

本稿では、これまであまり述べられてこなかった文脈指示用法における文照応形 *bu, o* の使い分けについて述べ、多様な *bu, o* の文脈指示用法を処理できるような指示詞体系を提案する。以下に、トルコ語指示詞の先行研究を見ていく。

2 トルコ語指示詞の先行研究

現代トルコ語指示詞における従来の研究・解釈は、指示詞の様々な用法を伝統的な文法概念を用いて説明しようとするものと、指示詞の用法を独自の概念を導入し、新しい観点から説明しようとするものに分類することができる。

\* この原稿の完成に当っては、和田道夫先生に助言とコメントをいただきました。また、トルコ語の例文に関しては BALPINAR, Zafer に容認性を判断してもらいました。この場を借りて、ご協力いただいた方々に感謝の意を表します。最後に、本稿の内容を一層深く考え直す機会を与えて下さいました2名の匿名の査読者の方々ならびに編集委員の方々にも深くお礼を申し上げます。

## 2.1 bu, şu, o の用法を伝統的な文法概念を用いて説明しようとする先行研究

従来の文法書ではトルコ語の指示詞の指示用法は、(i)話し手から指示対象までの距離、(ii)1人称(話し手)・2人称(聞き手)・3人称(他者)のうちどの人称に近いか、とすることに基づいて説明されてきた。(i)の場合、話し手の近くにあるものを *bu*、話し手からやや離れているものを *şu*、話し手の遠くにあるものを *o* で指示するとされている (Lewis 1967, 飯沼 1995, Ergin 2002, Banguoğlu 2004)。(ii)の場合、1人称の近くにあるものを *bu*、2人称の近くにあるものを *şu*、3人称の近くにあるものを *o* で指示するとされている (Kissling 1960)。さらに、(i)を基準にしているものの、*bu*, *şu*, *o* の用法を区別する上で別の基準を用いる解釈も存在する (Jansky 1943, Peters 1947, テュレリ 1969, Gencan 2001, Kornfilt 1997)。

Jansky (1943) 及び Peters (1947) は、*şu* と *o* の違いに関して、*şu* は目に見えるもの、*o* は目に見えないものを指示するのに用いると述べている。テュレリ (1969) は、*bu* と *şu* の区別に関して、話し手に近づいて来ようとするものを *bu*、話し手から離れて行こうとするものを *şu* で指示するとしている。また、既に述べられたことを指示する時 *bu*、後から述べようとすることを指示する時 *şu* を用いると言う (Gencan 2001:199 においても同様の指摘が見られる)。Gencan (2001:290) は指示代名詞の用法に関して「*İm adlları adların yerlerini tuttıkları gibi, önce geçmiş bir kavramın da; bir tümcenin, bir önermenin de yerini tutar.* (指示代名詞は名詞の代わりに用いられると同時に、既に述べられた概念、節、命題の代わりにも用いられる) (和訳は筆者)」と述べている。Kornfilt (1997) は、指示代名詞は照応的にも使用しようとしている。この場合、全般に *bu* と *o* が用いられ、「次のような」と言う意味では *şu* が用いられると言う。

## 2.2 bu, şu, o の用法を新しい観点から説明しようとする先行研究

Underhill (1976) はジェスチャーと言う基準に基づいて、*şu* で指示されるものはジェスチャーを伴う場合であり、*bu* 又は *o* で指示されるものはジェスチャーを伴わない場合であると述べており、かつ *bu* は話し手に近いもの、*o* は話し手から遠いものを指示するのに用いるとしている。さらに、Underhill (1976) は、テュレリ (1969), Gencan (2001), Kornfilt (1997) と同様に、照応用法 (anaphoric use) として *bu* と *o* が文中において既に述べられたことを、*şu* は後に述べられることを指示するのに用いられるとしている。一方、Underhill の主張に対し、林 (1985) は、「(聞き手が) 対象に既に気付いているかどうか」と言うことを *bu*, *şu*, *o* を使い分ける基準として用いることを提案している。林は、「聞き手が対象に既に気付いている」と話し手が見做している場合 *bu* 又は *o* を、「聞き手が対象にまだ気付いていない」と話し手が見做している場合 *şu* を用いるとしている。そして、「『対象に既に気付いているかどうか』

と言う点を『ディスコースに既に対象が導入されているかどうか』と言い換えることにより、ダイクシスだけではなく文脈指示にも適用できると考えられる(林 1985:57)」としている<sup>1, 2</sup>。また、*bu* と *o* との違いに関して林はそれぞれ話し手に近い・遠いものを指示するのに用いるとしている<sup>3</sup>。林(1985)と同様の指摘は、Göksel & Kerslake (2005)においても見られる。Göksel & Kerslake (2005)は、*bu/o* の指示対象は既に述べられたものであり、*şu* の指示対象は初めて焦点化されるものであるとしている。その場合、*bu* は近い対象、*o* は遠い対象に言及するのに用いられると言う。また、既に述べられており、かつ話し手又は聞き手の視界内にはない具体的な対象 (concrete item)<sup>4</sup>に言及する場合に *o* が用いられるとし、*bu* 及び *o* はいずれもコンテキスト内で主題化された対象を指示する場合に用いられるとしている。さらに、*şu* は話し手がこれから言うことを指示対象とすることができると言う。

西岡(2006)はチュルク諸語(ウズベク語・カザフ語・新ウイグル語・トルコ語・アゼルバイジャン語)の指示詞を扱った研究である。彼女は指示詞の用法を現場指示用法(発話現場で指示対象が見える場合)と非現場指示用法(発話現場で指示対象が見えない場合)に分け、後者をさらに独立指示用法(先行言語表現が不要な場合)と非独立指示用法(先行言語表現が必要な場合)に分類する。そして、現場指示用法の場合、トルコ語の指示詞 *bu* (近称)及び *o* (遠称)は(談話へ)導入済みの要素を指示するために用いるのに対し、*şu* (近称/遠称)は要素を談話へ新規に導入するために用いると言う。また、*bu, şu, o* の非現場指示用法について次のように指摘されている。

(1) トルコ語指示詞の非現場指示用法を決定する条件

i) 指示対象が談話へ導入されているか否か

*şu* : 新規導入

*bu, o* : 導入済み要素の指示

ii) 発話全体を指示するか否か(textual deixis か否か)

*bu* : 発話全体を指示(textual deixis)

*o* : 構成素の指示

iii) 相手発話内の構成素を指示可能か否か

*bu* : 相手の発話内の構成素を指示できない

*o* : 相手の発話内の構成素を指示

(西岡 2006:113 から引用)

<sup>1</sup> 林(1985)では「ダイクシス」と「文脈指示」と言う概念が用いられているものの、*bu, şu, o* の用法が「ダイクシス」と「文脈指示」に分類され、検討されているわけではない。同様のことが Komfilt (1997), Underhill (1976)についても言える。

<sup>2</sup> ディスコースとは対話者たちがお互いに共有していると思込んでいる場面及び文脈に関する知識である(林 1985:57)。

<sup>3</sup> 林(1985)と同様の主張は林(1989)においても見られる。

<sup>4</sup> Göksel & Kerslake (2005)では、具体的な対象 (concrete item) とする概念は定義されていない。

最後に、トルコ語指示詞を扱った研究としてバルプナル(2010b)が挙げられる。バルプナルは、「共通の空間」及び「聞き手による認識」という観点から現代トルコ語の指示詞 *bu*, *şu*, *o* の非文脈指示用法の体系について、素性分析の手法による交差分類を用いて検討する<sup>5</sup>。その結果、現代トルコ語の *o* 系列指示詞には次のような特徴があると言う。(i)「共通の空間」の対象を指示する *bu*, *şu* 系列指示詞とは異なり、*o* 系列指示詞は「非共通空間」内の対象を指示する指示詞である。(ii) *o* 系列指示詞は聞き手が対象に気付いていると話し手が判断する場合(表2の *o*<sub>1</sub>の場合)だけでなく、聞き手が対象に気付いていないと話し手が判断する場合(表2の *o*<sub>2</sub>の場合)にも用いられる点で、*bu*, *şu* 系列指示詞とは異なる分布を示している。(iii) *o* 系列指示詞はその使用に当って、*o*<sub>1</sub>, *o*<sub>2</sub>ともに(指さし等の直示的指示動作とは異なる)非直示的な限定要件を伴って使用される直示性の弱い指示詞である。(iv) *o* 系列指示詞には *bu*, *şu* 系列指示詞の場合に感じられる対象に対する話し手の側の共感性/共有性の含意が見られない。(v) *o* 系列指示詞は特定不可能な対象を非直示的に指示できる点で *bu*, *şu* 系列指示詞とは異なっている。さらに、上記特徴 (iii)-(v) は、*o* 系列指示詞が「非共通空間」の指示詞であるとする (i) の特徴の帰結であることが指摘されている。

表2 現代トルコ語における(言語テキスト生成時の)指示詞の体系

		共通空間	
		+	-
聞き手による認識	+	<i>bu</i> ①	<i>o</i> <sub>1</sub> ③
	-	<i>şu</i> ②	<i>o</i> <sub>2</sub> ④

(バルプナル 2010b:17)

以上、現代トルコ語の指示詞における諸研究をまとめた。その中で、Gencan (2001), Göksel&Kerslake (2005), 林(1985), Kornfilt (1997), Underhill (1976)の中心的な問題としては、照応的に用いられる *bu* と *o* はどう使い分けられるのかと言うことが挙げられるだろう。また、Göksel&Kerslake (2005)では、(既に述べられた対象を指示する) *o* には何故主題化された対象を指示する用法と具体的な対象を指示する用法が両方存在するのかと言うことにも触れていない。西岡(2006)に関しては、本論文

<sup>5</sup> 「共通の空間」とは、話し手と聞き手との間の共有可能性に基づく空間概念であり、「聞き手による認識」とは発話現場において話し手が対象の存在に気付いているか否かと言うことである。詳しくは Balpınar (2010a)、バルプナル(2010b)を参照のこと。

3.2 節で指摘する *o* が文を先行詞としてとる文照応形のデータをどう説明すればいいかと言う点と、(1)の一般化において記述されている *bu/o* の特性群をどのように説明するかと言う点が問題として残る。次節ではこれらの問題点に関して検討することにする。

### 3 トルコ語指示詞の文脈指示用法について

バルプナル(2012)では、トルコ語指示詞の用法に関して、指示対象が言語テキスト化されている(指示対象が先行する発話文脈内に顕在的に現れている)か否かが、指示詞の適切な使用を決定する最も重要な要因を成していることを指摘し、従来言われてきた現場指示(直示指示)であるか否かと言う観点(金水他 2002、西岡 2006)では不十分であることを論証した<sup>6</sup>。そして、トルコ語指示詞の指示用法を「指示対象が先行発話文脈内で言語テキスト化されているか否か(言語テキストとして顕在化しているか否か)」と言う観点から、「非文脈指示用法(先行発話文脈内で言語テキスト化されていない対象を指示する用法)」及び「文脈指示用法(先行発話文脈内で言語テキスト化されている対象を指示する用法)」に大別し、前者においてはバルプナル(2010b)で述べた「共通の空間」、「聞き手による認識」と言う概念が、後者においては「管理可能な領域(controllable domain)」と言う概念が、それぞれ中心的な役割を担うことを論じた。本稿では、さらにこのような観点からだけではまだ十分に説明することができないトルコ語指示詞の現象が存在することを指摘し、それらの現象を説明するに当って、「先行発話文脈中の名詞表現又は類似名詞表現が繰り返し用いられている(非照応用法)か否(照応用法)か」が重要な役割を果たしていることを論じる(3.1 節)。次に先行発話文脈中の名詞表現又は類似名詞表現の繰り返し・省略を伴わない *bu/o* の文脈指示用法(照応用法)では *bu/o* はその指示内容として文要素を指示することができることを指摘する。さらに同じ文要素であっても、*o* は「開放文(open sentence)」を、*bu* は「非開放文(non-open sentence)」を指示するのに用いられることを具体例を検討しながら論証する(3.2 節)。最後に、*bu/o* が照応用法として用いられる場合、現代トルコ語では指示詞 *o* は文及び名詞句を先行詞とする文照応形(sentence anaphor)、名詞句照応形(NP anaphor)として用いることができるのに対し、指示詞 *bu* は文照応形としてしか用いることができないのは何故かと言うことを3.3 節で検討する。名詞句指示に関するトルコ語指示詞 *bu* と *o* の間に見られるこのような非対称性の重要性を初めて明示的に指摘したのは(筆者の知る限りでは)Bastuji(1976)である<sup>7</sup>。3.3 節ではこの Bastuji の問題が、本稿で主張する「*o*

<sup>6</sup> ここで言う発話文脈とは、発話者が音声又は一定の書記法を用いて表出した(言語)テキストを指す。

<sup>7</sup> Bastuji(1976)が問題としているのは、トルコ語指示詞 *bu, şu, o* のうち、何故(*bu, şu*ではなく) *o* が3人称人称代名詞として用いられているかと言うことであり、彼女はこの問題を対話の空間(l'espace

は開放文を指示する文照応形である」と言う指示詞 *o* の持つ特性の帰結の一つとして解決できることを論じる。

### 3.1 トルコ語指示詞における文脈指示用法の再検討

バルブナル(2012)ではトルコ語指示詞の指示用法を「文脈指示用法」と「非文脈指示用法」に分類し、先行名詞(先行詞)が繰り返し用いられる用例を取り扱って文脈指示用法の *bu/o* の非照応用法について検討した。その結果、先行する発話文脈内で言語テキスト化された先行名詞が *bu/o* + 名詞の形で繰り返し用いられている場合には、「指示対象が空間的または心理的に話し手から近いかわ遠いか」ではなく、指示対象が話し手にとって「管理可能な領域」に存在するか否かと言う概念が有効であることが分かった。例えば以下の文を見てみよう<sup>8</sup>。

(2) (話し手は隣にいる聞き手に対して)

Göz-üm-e	birşey	kaç-tı.	Çok	acı-yor...
目-1 人称単数-与格	何か	入る-過去形	とても	痛む-継続形
Bu mendil-le	{*bu/*şu/o}	şey-i		
このハンカチ-で	その	もの-対格		
al-sa-n-a!				
取る-仮定形-2 人称単数-強調詞				

(僕の)目に**何か**入った。とても痛い...このハンカチで**それ**を取ってくれ!

(2)では、指示対象(話し手の目に入ったもの)を *bu* で指示することができない。従来言われてきたように、もし指示対象が(空間的または心理的に)自分に近いと話し手が判断したものを *bu*、(空間的または心理的に)自分に近くないと話し手が判断したものを *o* で指示するのであれば、(2)の場合指示対象(話し手の目に入ったもの)を指示するのに *bu* が選択されるはずである。しかし、この例では *o* しか容認されな

---

de communication)と言う非統語的概念を用いて検討しており、本稿で用いている開放文(open sentence)や文照応形(sentence anaphor)と言う統語的概念を用いて論じているわけではない。

<sup>8</sup> 以下の例文(2)から(4)までの記述はバルブナル(2012)で取り扱った内容を再述したものである。なお、1名の編集委員の方から、「管理可能性」の条件と「空間的または心理的距離」の条件は同じものではないかとの指摘をうけた。しかし筆者は本文(2)、(3)に見られるような *o* の用法を「空間的または心理的距離」で説明することは、不可能ではないが、あまり適切ではないだろうと考えている。さらに後者の条件は、そもそも(A or Bと言う)離接的(disjunctive)な形式で述べられている点に大きな問題点があると考えている。筆者は「管理可能性」は「空間的または心理的距離」の十分条件であり、その逆ではないと考えているので、その意味で「管理可能性」の条件は、「空間的または心理的距離」の条件のもつ離接性をその帰結の一つとして導き出すことができるより一般性の高い条件であると考えている。



い。その理由としては、(2)では話し手が指示対象が何であるかを自分で自由に見たり、主体的に確認したりできないところにあるため、この場合、指示対象は話し手の自由な認識や活動が及ばないところにあるからであると考えられることができる。このように考えることによって、次のような用例もうまく説明できる。

- (3) (話し手が危険な山道で車を運転している場面である。そこで、助手席にいる聞き手に対して)

Ön-üm-deki panel-de kırmızı bir **düğme** var ya.

前-1人称単数-連体化 パネル-位格 赤い 一 ボタン ある よね

{\*bu/\*?şu/o} **düğme-ye** bas-ar mı-sınız?

その ボタン-与格 押す-アリスト 疑問形-2人称複数

(私の)前にあるパネルに赤いボタンがあるでしょう。そのボタンを押してくださいか?

(3)では、赤いボタンは話し手のすぐ目の前にあるのだから、従来の考え方からすれば bu の使用が予測されるはずである。しかし、実際にはこの場合も指示対象(赤いボタン)を bu で指示することは不可能で、o で指示されている。それは、(3)では話し手が手をハンドルから離すことができない状況にあるため、たとえ直ぐ目の前であっても手を伸ばして指示対象(ボタン)を押すことができない状態にあるからであると考えられることができる。換言すれば、(3)の場合、指示対象は(たとえ話し手のすぐ近くにあっても)話し手の「ボタンを押す」という主体的で自由な行為活動が及ばない空間にあるということである。

一方、(4)では販売員が車の中で助手席に坐っている聞き手に対して手元にあるボタンを bu で指示している。

- (4) (車の販売員が、車の様々な特徴を客である聞き手に次々と説明している場面である)

Direksiyon-un üzer-in-deki **düğme-yi** gör-üyor

ハンドル-属格 上-属格人称語尾-連体化 ボタン-対格 見る-継続形

mu-sunuz? {bu/\*şu/\*o} **düğme** araba-nın

疑問形-2人称複数 この ボタン 車-属格

silecek-ler-i-ni çalış-tır-ır.

ワイパー-複数形-属格人称語尾-対格 動く-使役形-アリスト

ハンドルの上にあるボタンが見えますよね。このボタンは車のワイパーを作動させます。

この場合、指示対象(ボタン)は(2)-(3)のケースとは逆に、話し手が自由に見たり、主体的に操作したりできるところにある。つまり、(4)では、指示対象は話し手の自由な認識や活動が防げられていない空間にあるということである。

以上の観察をもとに、「発話において話し手(発話者)の主体的で自由な認識や活動を防げないと話し手が判断した領域」を話し手による「管理可能な領域」と呼ぶことにすれば、(4)の **bu** は話し手の「管理可能な領域」にある対象を、(2)-(3)の **o** は話し手の「管理可能な領域」にない対象を指示するのに用いられていると考えることができる。

バルプナル(2012)では論じなかったが、同様のことは、先行名詞が繰り返して用いられていない(この場合は先行名詞の省略)次のような場合((2)'-(4)')でも観察することができる。

(2)' (話し手は隣にいる聞き手に対して)

Göz-üm-e                      **birşey**    kaç-tı.                      Çok                      acı-yor...  
 目-1 人称単数-与格    **何か**    入る-過去形                      とても                      痛む-継続形  
 Bu                      mendil-le                      {\*bu/\*şu/o}-nu  
 この    ハンカチ-で                      **それ**-対格  
 al-sa-n-a!  
 取る-仮定形-2 人称単数-強調詞  
 (僕の)目に**何か**入った。とても痛い...このハンカチで**それ**を取ってくれ!

(3)' (話し手が危険な山道で車を運転している場面である。そこで、助手席にいる聞き手に対して)

Ön-üm-deki                      panel-de                      kırmızı                      bir                      **düğme**  
 前-1 人称単数-連体化    パネル-位格                      赤い                      一                      **ボタン**  
 var    ya.    {\*bu/\*şu/o}-na                      bas-ar                      mı-sınız?  
 ある よね                      **それ**-与格                      押す-アリス                      疑問形-2 人称複数  
 (私の)前にあるパネルに赤い**ボタン**があるでしょう。**それ**を押してくれますか?

(4)' (車の販売員が、車の様々な特徴を客である聞き手に次々と説明している場面である)

Direksiyon-un                      üzer-in-deki                      **düğme**-yi                      gör-üyor  
 ハンドル-属格    上-属格人称語尾-連体化    **ボタン**-対格                      見る-継続形  
 mu-sunuz ?                      {\*bu/\*şu/\*o}    araba-nın  
 疑問形-2 人称複数    **これ**                      車-属格



silecek-ler-i-ni

çalış-tr-ır.

ワイパー—複数形—属格人称語尾—対格 動く—使役形—アリスト

ハンドルの上にあるボタンが見えますよね。これは車のワイパーを作動させます。

(2)′-(4)′は場面設定が(2)-(4)と同じである。(2)-(4)と(2)′-(4)′の唯一の違いは、(2)-(4)では先行名詞が発話文脈中に繰り返し用いられるのに対し、(2)′-(4)′では同一の先行名詞が(省略のため)繰り返し用いられていないと言う点(見かけ上の非繰り返し用法)である。両者の場面設定が同じであることを考えるなら、(2)-(4)の場合と同様に、(2)′-(3)′及び(4)′においても指示対象はそれぞれ話し手からみて話し手の「管理可能な領域」にないもの((2)′-(3)′の場合)、話し手の「管理可能な領域」にあるもの((4)′の場合)として見ることができる。この考え方が正しいならば、上で見た繰り返し用法の(2)-(4)の場合と同様に、*bu/o* の見かけ上の非繰り返し用法の場合も指示対象を指示するのに(2)′-(3)′では指示代名詞の *o*、(4)′では指示代名詞の *bu* が選択されるはずである。実際に、我々の考え通り、(2)′-(3)′では *o*、(4)′では *bu* が容認されるのである<sup>9</sup>。

以上、(2)-(4)と(2)′-(4)′の例文から、指示対象が先行する発話文脈内で言語テキスト化されている場合((2)-(4)、(2)′-(4)′)には、繰り返し用法「*bu/o* + 名詞」((2)-(4)は、見かけ上の非繰り返し用法の *bu/o*((2)′-(4)′)に置き換え可能であると言うこと、そして「*bu/o* + 名詞」と見かけ上の非繰り返し用法の *bu/o* はいずれもその背後に「管理可能な領域」と言う概念が働いていると言うことが分かる<sup>10</sup>。従って、(2)′-(4)′のような場合に用いられる非繰り返し用法の *bu/o* は、「文脈指示用法(text dependent use)」の一種であり、文脈指示用法における「*bu/o* + 名詞」の省略形であると考えることができる<sup>11</sup>。

同じく、バルプナル(2012)では論じなかったが、「管理可能な領域」と言う概念は、同一の先行名詞が繰り返し用いられる場合((2)-(4))だけでなく、先行発話文脈中の

<sup>9</sup> (2)′-(3)′及び(2)′-(3)′は、既にディスコースに導入されており、かつ話し手に近い指示対象を *o* 系列指示詞で指示すると言う点で林(1985、1989)の反例になる。

<sup>10</sup> (2)-(4)のように先行名詞の繰り返しが観察される形式(*bu/o* + 名詞)と(2)′-(4)′のように非繰り返し用法の *bu/o* が現れる形式がどちらも可能である場合には、後者の非繰り返し用法の方がより好まれる傾向にある(筆者が事前に行ったインフォーマントチェックによる)。こうした傾向の背後には、他の条件が同じであるならば、より簡潔な形式が選択されるとする言語活動の「経済性」と言う側面が働いていると考えることができる。

<sup>11</sup> (2)′-(4)′の非繰り返し用法の *bu/o* は、*bu/o* + 名詞形式の省略形であると言う点で見かけ上の非繰り返し用法であり、後述表 3 の非照応用法に相当し、文を先行詞とする(省略を伴わない真の非繰り返し用法である)文照応形の *bu/o* と区別する必要がある。又、先行名詞の繰り返しをそもそも許さない純粋な名詞句照応形としての *o* とも区別されるべきである。(このことについては後述 3.2、3.3 節参照)

名詞の類似名詞が繰り返して用いられる次のような場合(5)にも同じく有効である  
 と言うことを述べておきたい<sup>12</sup>。

- (5) Geçen hafta ev-imiz-de baba-m-a doğum  
 先週 家-1 人称複数-位格 父-1 人称単数-与格 誕生  
**gün-ü parti-si ver-di-k.**  
 日-属格人称語尾 パーティー-属格人称語尾 あげる-過去形-1 人称複数  
 {bu/\*şu/\*o} kutlama-da ben o-nun için bir şarkı  
 その お祝い-位格 私 彼-属格 ために 一 歌  
 söyle-di-m.  
 歌う-過去形-1 人称単数  
 先週(我々の)家で父の誕生日パーティーを行いました。そのお祝いで私は父の  
 ために歌を一つ歌いました。

- (5)' Geçen hafta ev-imiz-de baba-m-a doğum  
 先週 家-1 人称複数-位格 父-1 人称単数-与格 誕生  
**gün-ü parti-si ver-di-k**  
 日-属格人称語尾 パーティー-属格人称語尾 あげる-過去形-1 人称複数  
 {bu/\*şu/\*o} parti-de ben o-nun için bir şarkı  
 その パーティー-位格 私 彼-属格 ために 一 歌  
 söyle-di-m.  
 歌う-過去形-1 人称単数  
 先週(我々の)家で父の誕生日パーティーを行いました。そのパーティーで  
 私は父のために歌を一つ歌いました。

(5)では類似名詞(parti と kutlama)が繰り返し用いられ、一方(5)'ではバルプナル  
 (2012)で考察したデータと同様に同一名詞(parti)が繰り返し用いられている。(5)  
 の例文に見られる bu/o の分布から言えることは、必ずしも同一名詞の繰り返し((5)  
 の場合)がなくても、一定の条件(注 12 の条件)のもとで、類似名詞が繰り返される  
 場合((5)の場合)には、文脈指示用法の指示詞の選択において、同一名詞の繰り返し

<sup>12</sup> 先行発話中の名詞((5)の partisi)の類似名詞((5)の kutlama)が繰り返し用いられる場合、先行名詞  
 (X)と bu/o と共に現れる繰り返し類似名詞(Y)との間には、「(X)は(Y)の一種である」と言う関係が  
 成立していることが必要であると思われる。なお、(5)-(5)'で指示詞 bu が用いられるのは、誕生パ  
 ーティーが話し手の直接体験した出来事であり、その意味で話し手の「管理可能な領域」内にある  
 からである。同様のことは(5)"-(5)'"についても言える。「管理可能な領域」についてはバルプナル  
 (2012)参照。

である(5)'の場合と同一条件(管理可能な領域性の条件)が働いていると言うことが見てとれることである。いま、同一名詞の繰り返し用法と類似名詞の繰り返し用法が同一の条件に従うことから、これら二つの用法を同一の範疇に入れて考えるならば、文脈指示用法の *bu/o* の分布を「管理可能性」の観点から決定する大きな手がかりの一つは、同一又は類似名詞の繰り返し(又は省略)を伴う点にあると言うことができるであろう。同様のことは次の例からも観察することができる。

- (5) "Beş gün önce İstanbul-da bomba-lı bir saldırı  
 五 日 前 イスタンブール-位格 爆弾-形容詞化 一 攻撃  
 gör-dü-m. O gün-den beri {bu/\*şu/\*o} olay-ı  
 見る-過去形-1 人称単数 あの 日-奪格 以来 その 出来事-対格  
 unut-a-mı-yor-um.  
 忘れる-可能形-否定形-継続形-1 人称単数  
 (私は)五日前にイスタンブールで爆弾**事故**にいました。あの日以来、**その出来事**を忘れることはできません。

- (5) "'Beş gün önce İstanbul-da bomba-lı bir saldırı  
 五 日 前 イスタンブール-位格 爆弾-形容詞化 一 攻撃  
 gör-dü-m. O gün-den beri {bu/\*şu/\*o} saldırı-yı  
 見る-過去形-1 人称単数 あの 日-奪格 以来 その 攻撃-対格  
 unut-a-mı-yor-um.  
 忘れる-可能形-否定形-継続形-1 人称単数  
 (私は)五日前にイスタンブールで爆弾**事故**にいました。あの日以来、**その事故**を忘れることはできません。

さて、同一の先行名詞の繰り返しの場合(バルプナル(2012))だけでなく、類似名詞が発話文脈中に繰り返し用いられている場合及び同一・類似名詞の省略の場合にも *bu/o* の分布に関して、「管理可能な領域」と言う概念が働いていることを見たが、そのような繰り返しの存在しない場合(又は繰り返し名詞の省略が想定できない場合)にも、「管理可能な領域」と言う概念は、文脈指示用法に対して有効なのだろうか? 次の例を見ていただきたい。

- (6) Geçen hafta ev-imiz-de baba-m-ın doğum  
 先週 家-1 人称複数-位格 父-1 人称単数-属格 誕生

gün-ü-nü                      kutla-dı-k.                      {\*bu/\*şu/o} parti-de  
 日-属格人称語尾-対格    祝う-過去形-1 人称複数    その パーティー-位格  
 ben    o-nun    için    bir şarkı söyle-di-m.  
 私    彼-属格    ために    一 歌    歌う-過去形-1 人称単数  
 先週(我々の)家で父の誕生日をお祝いしました。そのパーティーで私は父のた  
 めに歌を一つ歌いました。

(5), (5)'と比較してみれば容易に分かるように、(6)では、先行発話文脈中に同一又は類似の先行名詞が存在しないだけで発話の状況は(5), (5)'と全く同様であり、指示詞 *o* の先行詞(指示内容)は、先行発話文脈中にあると考えることができる。その意味では(6)も(5), (5)'と同様に文脈指示用法の一種と考えることができるだろう。そうだとすれば、他の条件が同じならば、(6)でも(5), (5)'の場合と同じく「管理可能性」の条件が働いて *bu* が選択されるはずである。しかし、(6)では *o* しか容認されない。このような場合、*bu/o* の選択に関して(5), (5)'と(6)で差が出ると言うことは、(5), (5)'と(6)を区別する要因は文脈指示であるか否か(先行発話文脈中に指示内容が顕在しているか否か)に求められるのではなく、「先行文脈中の名詞と同一又は類似の名詞が繰り返し用いられているか否か」に求められるべきであることを示唆している。即ち、(5), (5)'と(6)の *bu/o* の分布は同じ文脈指示用法(同じ発話状況の中での発話であり、指示内容が先行発話文脈中に存在している)にもかかわらず、(5), (5)'はバルプナル(2012)で述べた「管理可能性」の条件に従い、一方(6)は文脈指示用法であるにもかかわらず、「管理可能性」の条件に従っていないことである。言い換えれば、(6)の文脈指示用法に見られる *bu/o* の分布はバルプナル(2012)の「管理可能性の条件」が想定していない現象が文脈指示用法のなかにはまだ存在していることを示していると言えるだろう。このこと((6)のデータ)は我々に文脈指示用法の *bu/o* の分布は決して一枚岩ではなく、先行文脈中の名詞と同一又は類似の名詞を繰り返し用いる繰り返し用法と、そのような繰り返し(及び省略)の用いられていない非繰り返し用法とを区別して考える必要があることを強く示唆していると言えるだろう<sup>13</sup>。

以上、*o* の文脈指示用法の中には、バルプナル(2012)で想定した「管理可能な領域」と言う概念ではうまく説明することができない現象が存在することを見たが、

<sup>13</sup> (6)の発話状況は、(5), (5)'と同じである。(注)12で触れたように、(5), (5)'で指示対象(お祝い/パーティー)の存在が話し手の直接的知識に基づくものであり、その意味で話し手の「管理可能な領域」に存在するものであるなら、同じ意味で(6)の指示対象(パーティー)も又「管理可能性」の観点からは話し手の「管理可能な領域」に存在し、従って *bu* で指示されるはずであるが、実際には *o* しか容認されない。

次の(8)に見られる *bu* の文脈指示用法の例についても同様のことが言える。

- (7) A: Bugün baba-m-in doğum gün-ü.  
 今日 父-1 人称単数-属格 誕生日-属格人称語尾  
 Akşam restoran-a gid-e-lim.  
 夕方 レストラン-与格 行く-意思形-1 人称複数  
 今日はお父さんの誕生日だよ。夕方レストランに行こう。
- B: Hangi restoran-a?  
 どの レストラン-与格  
 どのレストランに？
- A: Geçen hafta git-tiğ-imiz restoran-a  
 先週 行く-連体形-1 人称複数 レストラン-与格  
 (gid-e-lim)  
 行く-意思形-1 人称複数  
 先週行ったレストランに(行こう)。
- B: Evet, {\*bu/\*şu/o} yer-in yemek-ler-i güzel.  
 うん その 場所-属格 料理-複数形-属格人称語尾 良い  
 うん、その/あのところの料理は美味しいね。(西岡 2006:111(改変))
- (8) A: Bugün baba-m-in doğum gün-ü.  
 今日 父-1 人称単数-属格 誕生日-属格人称語尾  
 Akşam restoran-a gid-e-lim.  
 夕方 レストラン-与格 行く-意思形-1 人称複数  
 今日はお父さんの誕生日だよ。夕方レストランに行こう。
- B: Hangi restoran-a?  
 どの レストラン-与格  
 どのレストランに？
- A: Geçen hafta git-tiğ-imiz restoran-a  
 先週 行く-連体形-1 人称複数 レストラン-与格  
 (gid-e-lim)  
 行く-意思形-1 人称複数  
 先週行ったレストランに(行こう)。
- B: Evet, {bu/\*şu/\*o} fikir güzel.  
 うん その 考え いい  
 うん、その考えはいいね。(西岡 2006:112(改変))

(7)のBの第2発話のyerは、先行するAの発話中のrestoranの類似名詞を繰り返したものであり、上で述べた同一又は類似名詞の繰り返しの例に当たる。その意味ではo yerの指示対象(restoran)は名詞句として先行発話文脈中に顕在しており、(7)はバルプナル(2012)で言う典型的な文脈指示用法に相当し、指示詞oの選択は、先行名詞(restoran)が対話相手の発話中にあることを考えれば、「管理可能性の条件」から容易に予測することができる。一方(8)のBの第2発話は、(7)と同じ発話状況で発せられたものであることは言うまでもない。名詞句bu fikirの想定される指示対象(この場合指示対象は(7)の場合とは異なり文として先行発話文脈中に顕在している)が対話相手の発話中に存在することを考えるならば、「管理可能性の条件」はこの場合も指示詞oを選択することが予想される。しかしデータに見る通り、(8)ではoの選択は許されず、「管理可能性の条件」がその予測を誤っていることは明らかである。(7)と(8)の唯一の違いが、先行名詞と同一又は類似の名詞の繰り返しが用いられているか否かであることを考えるならば、名詞の繰り返しを伴わない文脈指示用法が、「管理可能性の条件」とは異なる条件に従っていることは明白であると言わざるを得ない。

以上、トルコ語指示詞の文脈指示用法について諸現象を検討した。その結果、(i)トルコ語指示詞の文脈指示用法には「管理可能な領域」と言う概念では説明できない現象が存在すること((6)及び(8)の場合)と、(ii)この概念で説明できるbu/oの用法と説明できないbu/oの用法を区別する上で、「先行文脈中の名詞と同一又は類似の名詞が繰り返し用いられているか否か」が重要な役割を果たしていることが分かった。

次節では、同一名詞や類似名詞の繰り返しがない場合((6)及び(8)のような場合)、bu/oの文脈指示用法の分布を決定している要因は何であるかということについて述べる。

### 3.2 「管理可能性」の条件に従わない文脈指示用法

前節で見た(6)及び(8)の用例をもう一度見てみよう。

- (6) Geçen hafta ev-imiz-de baba-m-in doğum  
 先週 家-1人称複数-位格 父-1人称単数-属格 誕生  
 gün-ü-nü kutla-dı-k. { \*bu/\*şu/o } parti-de  
 日-属格人称語尾-対格 祝う-過去形-1人称複数 その パーティー-位格  
 ben o-nun için bir şarkı söyle-di-m.  
 私 彼-属格 ために 一 歌 歌う-過去形-1人称単数  
 先週(我々の)家で父の誕生日をお祝いしました。そのパーティーで私は父のた



めに歌を一つ歌いました。

- (8) A: Bugün baba-m-in doğum gün-ü.  
 今日 父-1 人称単数-属格 誕生 日-属格人称語尾  
 Akşam restoran-a gid-e-lim.  
 夕方 レストラン-与格 行く-意思形-1 人称複数  
 今日はお父さんの誕生日だよ。夕方レストランに行こう。

B: Hangi restoran-a?  
 どの レストラン-与格  
 どのレストランに？

A: Geçen hafta git-tiğ-imiz restoran-a  
 先週 行く-連体形-1 人称複数 レストラン-与格  
 (gid-e-lim)  
 行く-意思形-1 人称複数  
 先週行ったレストランに(行こう)。

B: Evet, {bu/\*şu/\*o} fikir güzel.  
 うん その 考え いい  
 うん, その考えはいいね。(西岡 2006:112(改変))

(6)及び(8)で用いられている *bu/o* とバルプナル(2012)で検討した *bu/o* の違いは何だろうか？一つの考え方として、バルプナル(2012)で検討した同一名詞の繰り返しを伴う文脈指示用法の *bu/o* は先行発話文脈中に顕在する指示対象名詞及び *bu/o* で限定された繰り返し同一名詞が「管理可能性」領域上にどのように分布するかを示す手がかりとして用いられており、一方(6)及び(8)では *bu/o* は同じ発話環境(文脈指示用法)において、*bu/o* で指示された名詞句全体の指示内容を *bu/o* の何らかの特性を手がかりにして求める用法として考えることができる。その場合、後者の名詞の繰り返しを伴わない文脈指示用法の指示詞 *bu/o* の分布を決定している特性とは一体何だろうか？このことを考えるために、(6)及び(8)の *bu/o* + 名詞が、それぞれ、以下のようにパラフレーズすることができることを考えてみよう。

- (6)' [Geçen hafta ev-imiz-de baba-m-in  
 先週 家-1 人称複数-位格 父-1 人称単数-属格  
 doğum gün-ü-nü kutla-dığ-ımız] parti  
 誕生 日-属格人称語尾-対格 祝う-連体形-1 人称複数 パーティー  
 [先週(我々の)家で父の誕生日をお祝いした] パーティー

- (8)' [Geçen hafta git-tiğ-imiz restoran-a  
先週 行く-連体形-1 人称複数 レストラン-与格  
git-me] fikr-i  
行く-連体形 考え-属格人称語尾  
[先週行ったレストランへ行くと言う]考え

(6)', (8)'のパラフレーズから分かることは、(6), (8)の指示詞 **bu/o** が、(6)'では関係代名詞節として、(8)'では同格節として、あらわされていることである<sup>14</sup>。このことから我々は(6)及び(8)で用いられている(名詞の繰り返し、又は省略を伴わない)文脈指示用法指示詞 **bu/o** は、関係代名詞節、同格節の形であらわされている先行する文(sentence)を指示対象としていることを読み取ることができる。このように考えるなら、(6)及び(8)の **bu/o** の用法に関して次のように一般化ができるだろう。

- (9) (先行発話文脈中の名詞の繰り返し又は省略を伴わない)文脈指示用法の **bu, o** はいずれも文を先行詞とする「文照応形(S-anaphor)」として用いることができる<sup>15</sup>。

では、文を先行詞とする文照応形の **bu** や **o** はどのような基準でそれぞれの分布が決定されているのだろうか? この問題を考えるに当たって次の(10)-(11)を見てみよう。

- (10) A: Zavallı kadın-ın akl-ı  
かわいそうな 女性-属格 脳みそ-属格人称語尾  
baş-ı-nda değil.  
頭-属格人称語尾-位格 ではない  
かわいそうに、その女性は気が狂っているんだ。

<sup>14</sup> (8)'の[geçen hafta gittiğimiz restorana gitme]部分が関係代名詞節ではなく、同格節であることは被修飾名詞(fikir)に属格3人称語尾が付加され、fikri\_となっていることから明らかである。よく知られているようにトルコ語では関係代名詞節で修飾される被修飾名詞は決して属格3人称語尾を伴うことはない。このことが持つ意味については、3.2節後半部分の本文で考察する。

<sup>15</sup> 筆者は名詞の繰り返しや省略を伴わない((6)や(8)のような)文脈指示用法の指示詞は、指示詞(**bu/o**)自身が先行発話文脈中の要素(ここでは文)と同一指示関係(co-indexation)を有する点で、照応形(anaphor)と考えている(この場合は文照応形)。一方、繰り返しや省略を伴う((2)-(4)、(2)'-(4)')のような文脈指示用法の指示詞は、先行発話文脈中に指示詞自身と同一指示関係を持つ要素が(少なくとも統語的には)存在しておらず(先行発話文脈中の要素と同一指示関係を持つのは **bu/o**+名詞句全体であり、**bu/o** 自身ではない。)、指示詞 **bu/o** は「管理可能性」領域上の探索子として働いていると考えているので、その意味で繰り返しや省略を伴う **bu/o** は非照応形であると考えている。後述表3を参照されたい。

- B: Kendisi-ni hiç gör-medem {**bu**/\*şu/\*o}-nu  
 彼女自身-対格 全く 見る-否定形 **それ**-対格  
 nasıl söyle-r-siniz?  
 どうやって 言う-アリスト-2 人称複数  
 彼女自身を全く診察したこともないのに、どうして**そう**だと言えるのか?  
 (Livaneli 2006:156)

- (11) A: Dün bura-ya kim gel-di?  
 昨日 ここ-与格 誰 来る-過去形  
 昨日、ここへ誰が来ましたか?

- B: (Ben) {**bu**/\*şu/\*o}-nu bil-mi-yor-um.  
 (私) **それ**-対格 知る-否定形-継続形-1 人称単数  
 (私)**それは**知りません。

(10)-(11)の *bu/o* は(6)と(8)の場合と同様に名詞の繰り返しや省略を伴う用法でないことは言うまでもない。一方 *bu/o* の指示内容が先行発話文脈中に存在する(ここでは統語的に文として存在する)と言う点で文脈指示用法として用いられていることは明らかである。具体的には(10)では指示詞 *bu* は対話相手の発話内の文要素“*zavallı kadının akli başında olmadığı* (かわいそうなその女性が気が狂っていること)”を指示し、(11)では指示詞 *o* は同じく対話相手の発話内の文要素“*dün buraya kimin geldiği* (昨日ここへ誰が来たかと言うこと)”を指している。この意味で(10)-(11)の *bu/o* は、(6)と(8)で見た *bu/o* と同様に(9)で述べた文照応形として用いられていると言える。それでは、*bu/o* の分布を決定する要因として、これらの(*bu/o* の指示内容に対応する)文要素はそれぞれどういう特徴を持ち、どういう点で異なるのだろうか? 一つの考え方として、(10)の *bu* に対応する文要素は「非開放文(*non-open sentence*)」の形式を持ち、(11)の *o* に対応する文要素は「開放文(*open sentence*)」の形式を持っていることに着目してみよう<sup>16</sup>。本稿で言う「開放文(*open sentence*)」とは、統語形式的な観点から見た場合、文の統語的構成素の一部が何らかの理由で欠如している文のことを指している。例えば、(11)の指示詞 *o* に対応している文要素“*dün buraya kimin geldiği*”は次のような統語構造を持っていると考えることができる。

<sup>16</sup> *bu, o* の文脈指示用法が開放文の観点からも検討することが可能であることを示唆して下さった和田道夫先生に感謝します。

(11)' [kimin [dün buraya t gel (-diği) ] ]<sup>17</sup>  
 S

一方、(10)の指示詞 bu に対応している文要素 “zavallı kadının akli başında olmadığı” は(11)'で見たような wh-演算子の移動を伴っておらず、文要素の中に統語的観点から見て欠落している構成要素は存在しないと考えることができる。

(10)' [zavallı kadının akli başında olma (-diği) ]  
 S

この意味で、(11)'の文要素(S)は統語的に開放文であり、(10)'の文要素(S)は統語的に非開放文であると言うことができるだろう。

開放文はまた、意味論的な観点から、「与えられた文の真偽値が意味構造上決定することができない文」であると定義することもできる。この観点から(10)-(11)の用例を見た場合、(10)の bu に対応する文は非開放文、(11)の o に対応する文は開放文として見ることができる。つまり、kim (誰)に相当する意味論的な情報が(11)の文要素“dün buraya kimin geldiği”ではその価値が決定できないため、この文要素は真であるか偽であるかが意味論的に決定できない文ということになる。一方、(10)の“zavallı kadının akli başında olmadığı”は、(11)の場合と異なり、意味論的にその値を決定できない要素が存在しないため、真であるか偽であるかが決定できる文、別の言葉で言えば開放文ではない文(非開放文)として読み取ることができる。

以上の考察をもとに、文を先行詞とする文照応形 bu/o の文脈指示用法の分布条件を次のように一般化することができる。

(12) 文照応形としての bu/o は先行文が「非開放文(non-open sentence)」である場合に bu、先行文が「開放文(open sentence)」である場合に o が用いられる<sup>18</sup>。

(12)の文照応形指示詞 bu/o の分布に関する一般化が基本的に正しいと言うことは筆者がこれまでに集めた以下の文学作品等の実例からも窺うことができる。

(13) A: Geçmiş yüzyıl-lar-da                      dünya-nın    tek    kozmopolit  
          過去    世紀-複数形-位格    世界-属格    唯一    国際的な

<sup>17</sup> 生成文法統語論の分析では、LF 構造での wh-演算子(kimin)の文頭への移動の結果、文要素“dün buraya t gel (-diği)”は t で表示された部分の構成要素が欠けていると考えられている。

<sup>18</sup> トルコ語指示詞の研究において、bu/o が文を先行詞とする文照応形(S-anaphor)として用いられることを明示的に扱った研究はそれほど多くはない。又、文照応形の分布に関する本文(12)の観察は、筆者の知る限り、これまで報告されたことはないと考ええる。

şehir-ydi burası. Bugün-tün New York'-u-ndan,  
 都市-過去形 こちら 今-属格 ニューヨーク-属格人称語尾-奪格  
 Paris'-i-nden, Londra'-sı-ndan çok daha  
 パリ-属格人称語尾-奪格 ロンドン-属格人称語尾-奪格 ずっと  
 renkli-ydi ama şimdi ne yazık ki  
 生き生きとした-過去形 しかし 今 残念ながら  
 kaybol-du.

消える-過去形

過去数百年もの間世界で唯一の国際的な都市でした、ここは。今のニュー  
 ヨーク、パリ、ロンドンよりもずっと生き生きとしていました。しかし、  
 今残念ながら、姿を消してしまいました。

B: Neden?

何故

どうしてですか?

A: Bir paşa torun-u ol-duğ-unuz-a göre

一 将軍 孫-属格人称語尾 なる-連体形-2 人称複数-ため

{\*bu/\*şu/o}-nu siz ben-den daha iyi

それ-対格 あなた方 私-奪格 とても よく

bil-ecek-siniz hanımefendi.

知る-未来形-2 人称複数 奥方様

(貴方は)将軍のお孫さんですから、それを私よりもよくご存知の  
 はずです、奥方様。

B: Anla-ma-dı-m, lütfen söyle-yin.

分かる-否定形-過去形-1 人称単数 どうぞ 言う-2 人称単数(命令形)

分かりません、教えて下さい。(Livaneli 2006:204)

- (14) Bura-da mücadele-nin güçlen-me-si için ne-ler  
 ここ-位格 抵抗-属格 強化する-連体形-属格人称語尾 ために 何-複数形  
 yap-ıl-ma-sı gerek-ir ne  
 する-受身形-連体形-属格人称語尾 べき-アリスト 何  
 düşün-üyor-um, {\*bu/\*şu/o}-nlar-ı  
 考える-継続形-1 人称単数 それ-複数形-対格  
 anlat-tı-m.  
 話す-過去形-1 人称単数  
 ここで抵抗の強化のために何がなされるべきか、(私は)何を考えているか、

それを話してあげた。(Pamuk 1996:83)

(13)では話し手 A の第 2 発話中の指示詞 *o* が指しているのは、“*burası, geçmiş yüzyıllarda dünyanın tek kozmopolit şehriyken, şimdi neden (ortadan) kaybolduğu* (ここは過去数百年もの間世界で唯一の国際都市だったのが、今は何故姿を消してしまったのか)” という文要素であり、(14)では指示詞 *onlar* が指しているのは“*burada mücadelenin güçlenmesi için neler yapılması gerektiğini ne düşündüğüm* (ここで抵抗の強化のために何がなされるべきか(私が)何を考えているか)” という文要素である。容易に分かるように、これらの文要素は *wh*-疑問詞((13)の *neden*, (14)の *ne*)に相当する意味論的な情報の値が欠けているため、(11)で見た文要素の場合と同様に、開放文として見ることができる。従って、(13)-(14)では(12)の原則により *bu* ではなく、*o* が容認されるのである<sup>19</sup>。

また、次の用例は開放文を先行詞とする *o* は、先行文要素が *wh*-疑問文である場合だけでなく、*yes/no*-疑問文や選択疑問文である場合にも用いられることを示している。

(15) A: Ben-i silah altı-na mı al-acak-sınız?  
私-対格 兵役下-与格 疑問形 つける-未来形-2 人称複数  
私を兵役につけるのですか?

B: Lüzum hasil ol-ur-sa { \*bu/\*şu/o }-nu da yap-ar-ız.  
必要になる-アリスト-仮定形 それ-対格 も する-アリスト-1 人称複数  
必要でしたら、それもします。(Kulin 2007:355)

(16) O-nu bura-ya ölü-ler-i mi  
彼-対格 ここ-与格 死体-複数形-属格人称語尾 疑問形  
getir-miş-ti, yoksa ölü-ler-i-ni  
導き出す-完了形-過去形 それとも 死体-複数形-属格人称語尾-対格

<sup>19</sup> 文照応形の *o* が目的語位置だけではなく、主語位置にも分布することが次の例から分かる。

(i) A: Silah-sız, mühimmat-sız ne iş-e yara-r-lar  
武器-なし 弾薬-なし 何 こと-与格 役に立つ-アリスト-複数形  
ki o insan-lar?  
感嘆詞 あの 人間-複数形

武器、弾薬なしで何の役に立つんですか、あの人は?  
B: { \*bu/\*şu/o } iş-in en kolay kısm-ı, yenge...  
それ 問題-属格 一番 簡単な 部分-属格人称語尾 奥さん  
それは一番簡単なことです、奥さん。(Kulin 2007:127)



bura-ya gel-dik-ten sonra mı  
 ここ-与格 来る-過去形-奪格 後 疑問形  
 bul-muş-tu, { \*bu/\*şu/o }-nu da  
 見つける-完了形-過去形 それ-対格 も  
 bil-mi-yor-du.  
 知る-否定形-継続形-過去形  
 彼を(彼らの)遺体がここへ導き出したのか、それとも(彼らの)遺体を  
 ここに来てから見つけたのか、それも分からなかった。(Altan 2001:8)

(15)では、話し手Bの発話中の *o* が指しているのは、話し手Aの *yes-no* 疑問文全体であり、又(16)では *o* が指示しているのは、先行する話し手自身の選択疑問文全体である。*yes-no* 疑問文や選択疑問文が統語的に何らかの欠落部分(gap)を有するか否かは、wh-疑問文だけでなく、広く疑問文全体に疑問演算子(Q-operator)を認めるか否かの問題とも関連するが、その様な一般的な疑問演算子を認めるならば、(15)、(16)の文照応形指示詞 *o* の指示対象である先行文は統語的に開放文であると言えるだろう。一方意味論的な観点から見た場合、(15)、(16)の疑問文が、文の真偽価値をそもそも決定できないと言う意味で、意味論的に開放文であることは言うまでもない。従って原則(12)は、ここでも、文照応形として指示詞 *o* が選択されることを正しく予測できると言える<sup>20</sup>。

以上、文照応形 *o* の分布が、本稿の原則(12)に従うことを見てきたが、同様のことは以下の文照応形 *bu* の分布についても言えることは言うまでもない。

(17) A: Ben siz-in hayran-ınız-ım.  
 私 貴方-属格 ファン-属格人称語尾-1人称単数  
 私は貴方のファンです。  
 B: { \*bu/\*şu/\*o }-nu işitmek bir yazar olarak ben-i  
 それ-対格 聞くこと 一 作家 として 私-対格  
 kıvançlan-dır-ır.  
 喜ぶ-使役形-アリス  
 それを聞いて、作家の一人として嬉しいです。(Öğüt 2004:267)

(18) A: Ben-im için aşk-ımız-dan daha mühim  
 私-属格 にとって 愛-1人称複数-奪格 もっと 大切な

<sup>20</sup> (11)や(13)-(16)のような用例は、発話全体(文)を *o* で指示すると言う点で西岡(2006)の反例になる。

hiçbir şey yok.

何も ない

私には私達の愛よりも大切なものは何もありません。

B: Sen-in için {bu /\*şu/\*o} doğru ol-abil-ir.

貴方-属格 にとって それ 正しい なる-可能形-アリスト

Ama ben-im aşk-tan daha mühim iş-ler-im

しかし 私-属格 愛-奪格 もっと 大切な 仕事-複数形-属格人称語尾

var Mehpare.

ある メフパーレ

貴方にとって、それは正しいかもしれません。しかし、私には愛よりも大切なことがあります、メフパーレさん。(Kulin 2007:233)

(17), (18)の例文で文照応形指示詞 bu の指示対象はそれぞれ先行文 “Benim sizin hayranınız olduğum (私が貴方のファンであること)”、 “Benim için aşkımdan daha mühim hiçbir şey olmadığı (私には私達の愛よりも大切なものは何もないこと)”である。これらの先行文要素が上で述べた意味で、統語的にも意味論的にも非開放文であることは明らかだろう。従ってここでも又我々の原則(12)は文照応形の分布を正しく予測していると言うことができる。また文照応形の bu が、先に(注)19 で見た o の場合と同様に、目的語位置((17)の場合)にも、主語位置((18)の場合)にも分布できることも見てとることができる。

以上、先行名詞と同一または類似名詞の繰り返しや省略を伴わない文脈指示用法の指示詞 bu/o の分布を、(i) 当該の指示詞が文を先行詞とする文照応形であること、(ii) 文照応形の指示詞の分布は、先行する指示対象文が、開放文(open sentence)であるか否かに基づいて決定される、と言う2つの観点から検討してきた。以下では、このような観点を導入することによって、バルプナル(2012)の言う「管理可能な領域性」の条件が正しく予測することができない文脈指示用法の bu/o の分布がどのように正しく予測可能となるかについて述べたいと思う。

まず(8)の場合について見てみることにしよう。

(8) A: Bugün baba-m-in doğum gün-ü.

今日 父-1人称単数-属格 誕生 日-属格人称語尾

Akşam restoran-a gid-e-lim.

夕方 レストラン-与格 行く-意思形-1人称複数

今日はお父さんの誕生日だよ。夕方レストランに行こう。

B: Hangi restoran-a?

どの レストラン-与格

どのレストランに？

A: Geçen hafta git-tiğ-imiz restoran-a

先週 行く-連体形-1 人称複数 レストラン-与格

(gid-e-lim)

行く-意思形-1 人称複数

先週行ったレストランに(行こう)。

B: Evet, {*bu/\*şu/\*o*} fikir güzel.

うん その 考え いい

うん, その考えはいいね。(西岡 2006:112(改変))

(8)で用いられている *bu fikir* は、先行名詞と同一又は類似の名詞の繰り返しや省略が用いられている例であるとは、例文の発話文脈上想定することはできない。一方 *bu fikir* の指示内容が先行発話文脈中に存在すると言う点で、ここでの指示詞 *bu* の用法が本稿での定義上文脈指示用法であることも明らかである。いま *bu fikir* の *bu* の指示内容をパラフレーズして考えるなら、先に見たように(8)になると考えることができる。

(8)' [Geçen hafta git-tiğ-imiz restoran-a

先週 行く-連体形-1 人称複数 レストラン-与格

*git-me*] *fikir-i*

行く-連体形 考え-属格人称語尾

[先週行ったレストランへ行くと言う]考え

(8)'の [*geçen hafta gittiğimiz restorana gitme*] 部分に統語的に欠落している部分 (gap) が存在するとは考えることができない。そのことを統語的に保証しているのが名詞 (*fikir*) に付加されている属格 3 人称語尾 (-i) の存在である。(注)14 で述べたように、[文修飾要素]+名詞の形式で、名詞に属格 3 人称語尾が付く場合、文修飾要素部分は、同格節として働き、一方名詞に属格 3 人称語尾が付かない場合には文修飾要素が関係代名詞節として働くことは、トルコ語統語論の分野ではよく知られている現象である。いま、(8)'の被修飾名詞 *fikir* が義務的に属格 3 人称語尾をとり、*fikir<sub>i</sub>* として現れることは、(8)'の [*geçen hafta gittiğimiz restorana gitme*] の部分が同格節であると言う統語論的な保証となっている。同格節はその定義上統語的空白部分 (gap) を含まない構造であることを考えるなら、(8)'の *bu* の指示内容に対応する

[geçen hafta gittiğimiz restorana gitme] 部分が非開放文であることは言うまでもない。このように考えるならば、原則(12)が、(8)'で選択される文照応形指示詞が *o* ではなく *bu* であることを正しく予測することは明らかだろう。

次に(6)の場合について見てみることにしよう。

- (6) Geçen hafta ev-imiz-de baba-m-ın doğum  
 先週 家-1 人称複数-位格 父-1 人称単数-属格 誕生  
 gün-ü-nü kutla-dı-k. { \*bu/\*şu/o } parti-de  
 日-属格人称語尾-対格 祝う-過去形-1 人称複数 その パーティー-位格  
 ben o-nun için bir şarkı söyle-di-m.  
 私 彼-属格 ために 一 歌 歌う-過去形-1 人称単数  
 先週(我々の)家で父の誕生日をお祝いしました。そのパーティーで私は父のために歌を一つ歌いました。

(6)で用いられている *o parti* も又、先行名詞と同一又は類似の名詞の繰り返しや省略を伴う例であるとは発話文脈上考えることはできない。一方 *o parti* の指示内容が先行発話文脈中にしか求めることができないと言う点で、指示詞 *o* の用法が、本稿での定義上文脈指示用法であることも又明らかである。いま、(8)の場合と同様に、*o parti* の指示内容を下記のようにパラフレーズして考えてみよう<sup>21</sup>。

- (6)' [Geçen hafta ev-imiz-de baba-m-ın doğum gün-ü-nü kutla-dığ-ımız] parti  
 先週 家-1 人称複数-位格 父-1 人称単数-属格 誕生 日-属格人称語尾-対格 祝う-連体形-1 人称複数 パーティー  
 [先週(我々の)家で父の誕生日をお祝いした] パーティー

<sup>21</sup> 1名の編集委員の方から、本稿で想定している文照応用法の *bu/o* の指示内容のパラフレーズ表現が先行発話文脈中に(同一の統語・語彙形式では)存在しておらず、その意味においてパラフレーズ表現の計算が常に *vague* である危険性を含んでいるとの指摘をうけた。筆者は本文(6)に見られるような指示詞表現 *o parti* は概略下記(i)のような構造から[...]部分が先行文との同一性に基づいて統語的に削除されることによって派生されると考えている。

(i) [Geçen hafta evimizde babamın doğum gününü kutladığımız] *o parti*  
 一方生成文法では、削除操作は(語彙的にも統語的にも)強い復元可能性の条件(Recoverability Condition)に従うことが要請されており、その意味で可能なパラフレーズ表現は先行発話文脈中に文として与えられている情報から復元可能性の条件により(統語的 *ambiguity* を除けば)一つに決定可能であると考えており、指摘された *vagueness* の問題は発生しないと考えている。

(6)'は被修飾名詞 *parti* が、[*geçen hafta evimizde babamın doğum gününü kutladığımız*] 部分の文修飾要素を持つにもかかわらず属格 3 人称語尾を持たないことを考えるなら、[*geçen hafta evimizde babamın doğum gününü kutladığımız*] 部分は関係代名詞節であり、(6)'を統語的観点から見た場合、(6)"のような構造を持つと考えられる。

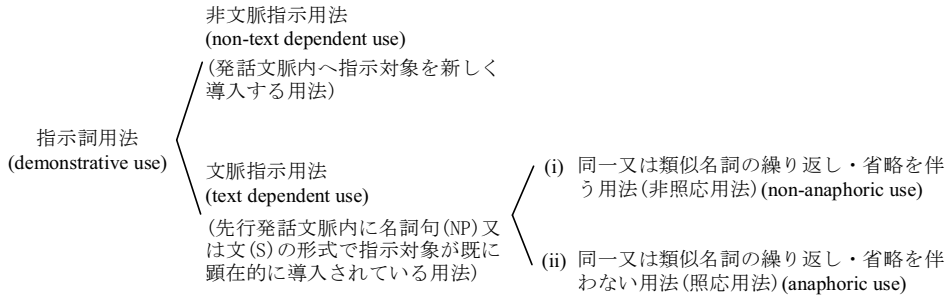
(6)" [*Geçen hafta ev-imiz-de t-de baba-m-in doğum gün-ü-nü kutla-dığ-ımız parti*]  
 先週 家-1 人称複数-位格 *t*-位格 父-1 人称単数-属格  
 誕生 日-属格人称語尾-対格 祝う-連体形-1 人称複数 パーティー  
 [先週(我々の)家で *t* で父の誕生日をお祝いした] パーティー

(6)"の *t* で表示された部分は、統語論的には関係代名詞節の被修飾名詞 *parti* 又は非顕在的な関係代名詞が移動した結果、後に残したトレース(gap)と考えられている。この意味でパラフレーズ(6)'の文修飾要素部分([*geçen hafta evimizde babamın doğum gününü kutladığımız*] 部分)は、統語的に空白部分(gap)を含んでおり、定義により開放文であると考えることができる。このように考えるなら(6)'の文修飾要素部分が文照応形指示詞 *o* に対応することは、我々の原則(12)が正しく予測する通りである<sup>22</sup>。

以上、先行文の名詞と同一名詞や類似名詞の繰り返しや省略がない場合に用いられる *bu/o* の文脈指示用法について検討した。その結果、(i) 当該文脈指示用法の *bu, o* はいずれも文を先行要素とする「文照応形(S-anaphor)」であること、また(ii) 文照応形の *bu, o* は、先行要素が開放文であるか非開放文であるかと言う基準でその分布が決定される((12)を参照)と言うことが分かった。これまでの議論をもとに、トルコ語指示詞における指示用法を次の表3のように分類することができる。

<sup>22</sup> トルコ語では関係代名詞節の形成に当って動詞語幹に連体接尾辞が付加される。トルコ語の最も基本的な連体接尾辞として *-En* と *-Dik* が用いられる。これらの連体接尾辞の使い分けに関しては、ギュロル(2009)で生成統語論の観点から興味深い分析がなされている。

表3 トルコ語指示詞における指示用法の分類<sup>23, 24</sup>



このように考えるならば、トルコ語指示詞の用法は、発話文脈内への指示対象の(新規)導入(言語テキスト化)を目的とする非文脈指示用法(バルプナル 2010b)と、発話文脈内に既に言語テキスト化されている要素を指示対象とする文脈指示用法(バルプナル(2012)、本稿)とに大別されることになるだろう。さらに、文脈指示用法は、一枚岩ではなく、本節で見た通りその用法をさらに非照応用法と照応用法とに分けて考える必要がある。非照応用法の場合、バルプナル(2012)で見た通り、「管理可能な領域」と言う概念が作動し、指示詞を伴う指示対象名詞の分布が、話し手にとって「管理可能な領域」内にある場合には **bu** が選択され、そうでない場合には **o** が選択されることになる。この用法の場合、先行発話文脈中に(同一指示に基づく)指示対象を持つのは(反復)名詞自身であり、指示詞 **bu/o** は「管理可能性」領域上に名詞表現がどのように分布するかを示す指標としてのみ用いられていると考えられる。この意味で、同一又は類似名詞の繰り返し・省略を伴う文脈指示用法の指示詞 **bu/o** の場合、**bu/o** 自身は(同一指示に基づく)照応形としては用いられていないと考えることができる。一方、本節で見た同一又は類似名詞の繰り返し・省略を伴わない文脈指示用法の場合、指示詞 **bu/o** の(同一指示に基づく)指示対象は明らかに先行する文要素であり、その意味では、当該用法の指示詞 **bu/o** は、(文)照応形として用いられていると言えよう。こうした文照応形としての指示詞の分布が(12)の「開放文の原則」に基づいて決定されていることは本節で見た通りである。

<sup>23</sup> 「発話文脈」については注6参照。

<sup>24</sup> 注15でも述べたように文脈指示用法 (i) は先行発話文脈中に **bu/o** 自身と同一指示関係 (co-indexation) に入る統語的要素は存在しないと考えられる。一方文脈指示用法 (ii) の場合、先行発話文脈中に **bu/o** 自身と同一指示関係を持つ要素が名詞句(NP)又は文(S)として統語的に顕在している。この意味で本稿では、文脈指示用法 (i) を(統語的)非照応用法、文脈指示用法 (ii) を(統語的)照応用法と呼ぶ。



### 3.3 名詞句照応形としての o の用法

前節では、a) 同一又は類似名詞の反復・省略を伴わない文脈指示用法の bu, o はいずれも文を先行詞とする「文照応形」であることと、b) 文照応形の bu, o はそれぞれ「非開放文」及び「開放文」を指示するということを見た。また、c) 「文脈指示用法」対「非文脈指示用法」という区分わけに加え、文脈指示用法指示詞の用法をさらに「照応用法」と「非照応用法」に分けて考える必要があることについて述べた。本節では先に述べた Bastuji の問題(注7 参照)を取り上げ、現代トルコ語では指示詞 bu/o は共に文照応形としての機能を持つのに、何故名詞句照応形としての機能は指示詞 o にだけ認められるのかについて検討し、o の持つ名詞句照応形としての働きは、「指示詞 o は開放文を指示する文照応形である」という本稿の主張から導き出すことのできる帰結の一つであることを論じる。次の用例をご覧ください。

- (19) A: Bir derd-in var-sa, şirket-te  
 ある 悩み-2 人称単数 ある-仮定形 会社-位格  
 görüş-ebil-ir-di-k.  
 会う-可能形-アリスト-過去形-1 人称複数  
 悩みがあるのなら、会社で会うことができたのに。
- B: Önce {\*bura /\*şura/ ora}-ya git-ti-m  
 先ず そこ-与格 行く-過去形-1 人称単数  
 yok-tu-n.  
 いない-過去形-2 人称単数  
 先ずそこへ行って見たんだけど、(貴方は)いなかった。(Öğüt 2004:46)
- (20) Ben bunca zaman-dır ölüm-e  
 私 これほど 時間-強調詞 死亡-与格  
 hazır-dı-m, {\*bu /\*şu/ o}-nu  
 準備ができている-過去形-1 人称単数 それ-対格  
 beklemek-te-ydi-m.  
 待つ-位格-過去形-1 人称単数  
 私はこれほどの間ずっと死を覚悟していたし、それを待っていた。  
 (Öğüt 2004:291)

(19) では ora は相手の発話内の şirket (会社) を、(20) の o は話し手自身の先行発話中の ölüm (死) を指示している。これらの用例から、o 系列指示詞は、先行発話文脈中の要素(名詞句)と同一指示関係(co-indexation)に入ることができる名詞句照応形

(NP-anaphor)であると言うことが分かる<sup>25</sup>。従って、o には文照応形としての働きの他に次のような特性があると考えられる。

(21) o は名詞句照応形 (NP anaphor) として用いることができる。

では、照応用法の o には「文照応形」の他に「名詞句照応形」としての用法が存在するのは何故なのだろうか？ ここで一つの手がかりとして、「文脈指示用法の bu/o は一定の条件のもとで(表3参照)いずれも文照応形として用いられるが、文照応形としての分布は指示対象である文要素が開放文であるか否かによって決定されている。」とする本稿の主張の持つ意味をもう一度考えてみよう。前節で取り上げた(8)'と(6)'の例をもう一度ご覧いただきたい。

(8)' [Geçen hafta gittiğimiz restorana gitme] fikri

(6)' [Geçen hafta evimizde babamın doğum gününü kutladığımız] parti

<sup>25</sup> 先に見た例文(2)′-(3)′の o、及び(4)′の bu は、見かけ上名詞句(NP)を先行詞とるように見えるが本稿で言う名詞句照応形ではない。何故なら、前にも述べたように、これらの用例の bu/o は bu/o +名詞句の省略形に過ぎないからである(3.1 節及び注 15 を参照)。これに対し、(19)-(20)の o を「o+名詞」の形に書き換えることができないということ((19)-(20)の o は省略形ではなく、(同一又は類似名詞の繰り返し・省略を伴わない)名詞句照応形であるということ)は次の(19)′-(20)′を見ると分かる。

(19)' A: Bir derd-in var-sa, şirket-te  
 ある 悩み-2 人称単数 ある-仮定形 会社-位格  
 görüş-ebil-ir-di-k.  
 会う-可能形-アリスト-過去形-1 人称複数  
 悩みがあるのなら、会社で会うことができたのに。

B: Önce \*o şirket-e git-ti-m  
 先ず その 会社-与格 行く-過去形-1 人称単数  
 yok-tu-n.  
 いない-過去形-2 人称単数  
 先ずその会社へ行ってみただけど、(貴方は)いなかった。

(20)' Ben bunca zaman-dır ölüm-e hazır-dı-m,  
 私 これほど 時間-強調詞 死亡-与格 準備ができている-過去形-1 人称単数  
 \*o ölüm-ü beklemek-te-ydi-m.  
その 死亡-対格 待つ-位格-過去形-1 人称単数  
 私はこれほどの間ずっと死を覚悟していたし、その死を待っていた。

なお、(19)-(20)の名詞句照応用法指示詞が、何故非照応用法形(指示詞+反復名詞形)を許さないのかは、大変興味深い問題ではあるが、ここでの議論に必要なのは、(19)、(20)の指示詞 o が本稿表3で言う照応用法形に相当し、かつ名詞句を先行詞とする点であり、そのことについては(19)/(19)'、(20)/(20)'のデータにより保証されていると筆者は考えており、上記問題については、(紙数上の都合もあり)稿を改めて論じたいと考えている。



(22)は同格節、(23)は関係代名詞節を含んでおり、いずれも【...】<sup>Ⓟ</sup>部分内の *t* で表示された位置から被修飾名詞 *İstanbul, dükkan* を統語的に取り出した構造を持っている。これらのテストは複合名詞句制約(*complex NP constraint*)テストとしてよく知られており、(22)の【...】<sup>Ⓟ</sup>は複合名詞句を形成していないこと、一方(23)の【...】<sup>Ⓟ</sup>は複合名詞句を形成していることが上のデータから読み取れる。同格節と関係節の構造の差が、本稿で想定しているように、[...] 部分の名詞句性の差にあるのならば、(23)の持つ複合名詞句性は関係代名詞修飾節 [*dün t kitap aldığı*] の NP 性に求めることができ、一方(22)の非複合名詞句性は同格修飾節 [*Türklerden t geri alma*] の非名詞句性にあると考えることができる<sup>26</sup>。

以上、現代トルコ語の関係代名詞節は文性と同時に名詞句性をも持つこと、一方同格節にはそのような特性は見られないことを、形態統語論及び統語論の観点から観察した。これらの観察は文照応形指示詞としての *bu/o* の分布の観点から次のように述べることができるだろう。

- (24) (i) 文照応形指示詞 *bu* の指示内容に対応する先行要素は、文性を持つが NP 性は持たない要素として統語計算上表示される。
- (ii) 文照応形指示詞 *o* の指示内容に対応する先行要素は、文性を持つと同時に NP 性をも持つ要素として統語計算上表示される。

(24)の知見が与えられるならば、照応用法指示詞 *bu/o* のうち *o* だけが名詞句照応形としても機能すること (*Bastuji* の問題)は、(24) (ii) で述べた文照応形指示詞 *o* の指示内容に対応する先行要素の NP 性に求めることができると考えることが可能になる。即ち、文照応形としての *o* の先行要素が持つ名詞句性が、名詞句照応形としての指示詞 *o* の存在を保証しているとする考えである。このように考えるならば、*Bastuji* の問題は、指示詞 *o* だけが持つ先行要素の名詞句性が名詞句照応指示詞(代名詞)用法としての *o* に投影された帰結の一つであると考えられると筆者は考えている。

一方、(24) (ii) の知見と、指示詞 *o* が名詞句照応形として用いられるとする観察は、本稿での主張とは逆に、名詞句照応形としての指示詞 *o* が持つ名詞句指向性が文照応形の *o* の先行要素の持つ名詞句性に反映された結果であると考えられることも、論理的な観点から言えば当然可能である(以下では、この考え方を代案と呼ぶことに

<sup>26</sup> この場合トルコ語では、下接条件(*subjacency condition*)の境界節点(*bounding node*)が英語等と異なり、NP と S' (又は CP)であると考えられることになるが、同様の境界節点のパラメータ化は *Rizzi*(1982)でも報告されている。

する)<sup>27</sup>。しかし筆者は、以下に述べる観点から本稿での視点の方が、(少なくとも)トルコ語指示詞の分布に関してはより大きな説明力を持つことができるだろうと考えている。

代案のように考えた場合にまず問題となるのは、照応用法指示詞 *bu/o* が持つ様々な特性を一つの説明可能な特性群 (*cluster*) として述べることができなくなる点である。代案の立場に立つと、*o* は名詞句照応形として名詞句を先行詞としてとる特性を持ち、その特性が文照応形に反映され、名詞句性を持つ文を先行詞とする文照応形としても機能していることになる。一方 *bu* は名詞句照応形としての特性を持たず、従って名詞句性を持つ文を先行詞としてとることはできないと考えることになる。このように考えた場合、*bu/o* がそもそも(名詞句性を合わせ持つか否かは別に)して文を先行詞としてとることができる文照応形としての特性を持つことを、名詞句を先行詞としてとる(又はとらない)と言う *bu/o* が持つ名詞句照応形としての特性の存在(又は不在)から導き出すことは可能だろうか?(少なくとも)筆者は可能ではないと考える。言葉を変えるなら、代案の立場では、照応用法の *bu/o* が持つ文照応形としての特性を、それぞれが持つ(又は持たない)名詞句照応形としての特性に還元することはできず、*bu/o* の文照応形としての特性と名詞句照応形としての特性を(相互に関係を持たない)個別の特性として記述することにならざるを得ない。この意味で、代案は照応用法 *bu/o* の持つ特性群を記述することはできても、説明することはできないと考えられる。換言すれば、代案は記述的妥当性は満たすことができても、より高次の説明的妥当性を満たすことはできないと考えられる。一方、本稿の立場に立つならば、*bu/o* が持つ名詞句照応形としての特性の存在(又は不在)は、「*bu/o* はいずれも文を先行詞にとり、*bu* は非開放文を先行詞とし、*o* は開放文を先行詞とする」と言う *bu/o* が持つ文照応形としての特性からそれぞれ導き出すことができる。その意味では本稿の立場は、*bu/o* の持つ文照応形としての特性及び名詞句照応形としての特性を、(その一方が他方の帰結であるという意味で)一つの説明可能な特性群 (*cluster*) として捉えることができ、照応用法の *bu/o* が何故観察された特性群だけを持ち、それ以外の(論理的に可能だが)実際には観察されない特性群を持ち合わせていないかと言うことに対して、単に記述するだけでなく、説明を与えることができるだろうと筆者は考えている。

次に言語習得の観点から *bu/o* の持つ観察された特性群を見てみよう。トルコ語習得中の子供は、現代トルコ語において *o* が名詞句を先行詞とする名詞句照応用法として使用されることは、周囲の発話から直接観察することができる。一方、*bu* が名詞句照応形として機能しないこと(同一又は類似名詞の繰り返し・省略を伴わずに

<sup>27</sup> 本稿の査読者の方からの指摘による。

bu が名詞句を先行詞として用いられた文が非文になること)は、直接これを観察することは不可能である。この意味で、言語習得の観点から見た場合、bu が名詞句照応形としての特性を持たないことは、言語習得中の子供にとって否定的データ・証拠(negative data・evidence)を形成し、o が名詞句照応形として特性を持つことは肯定的データ・証拠(positive data・evidence)として捉えられることになる。生成文法では他の条件が同じであるならば、言語習得は肯定的データ・証拠に基づいて行われると想定されており(Chomsky (1981))、この観点から見た場合、代案では、トルコ語習得中の子供がどのようにして bu が名詞句照応形として機能しないことを肯定的データ・証拠だけから習得できるかを説明することは極めて難しくなるだろうと考えられる。一方、本稿の立場に立つならば、トルコ語習得中の子供にとって、bu が文照応形として機能することは肯定的データ・証拠として与えられており、かつ bu の先行詞文が名詞句性を持たないことも、本稿で検討した通り、一定の統語環境における特定形態素(名詞人称接辞)の欠如として観察可能な肯定的データ・証拠として与えられている。その意味で本稿の立場は、子供が何故現代トルコ語の bu/o が持つ特定の特性群だけを正しく習得できるかを、肯定的データ・証拠だけを用いて説明することを可能にすると考えられる。

最後に、代案の立場をとる場合、一組の指示詞のうちで、何故特定の指示詞だけが名詞句照応形(又はいわゆる3人称代名詞形)として機能するのかと言う Bastuji の問題に対して答えを与えないだけでなく、そもそも問題設定を「何故特定の代名詞が指示詞としても機能するのか」と言う(少なくとも)筆者にとっては不自然な形で述べざるを得ないだろうと考える。

以上述べた理由により、現代トルコ語において文照応用法指示詞 o だけが同時に名詞句照応用法をあわせ持つことは、(12)で得られた本稿の主張の帰結の一つとして位置づけることができると考える。

#### 4 おわりに

本論文 3.1 節では、バルプナル(2012)で検討した、文脈指示用法の bu, o の分布を決定する、「管理可能な領域」と言う概念では十分に説明することができない現象がトルコ語指示詞の用法には存在することを指摘し、それらの現象を説明する上で「先行発話文脈中の名詞と同一又は類似の名詞が繰り返し用いられているか否か」と言う統語的観点が重要な役割を果たしていることを論じた。

続く 3.2 節では、同一名詞や類似名詞の繰り返しや省略を伴わない場合に用いられる bu, o の文脈指示用法を検討した。その結果、そのような bu, o には次のような特徴があることが分かった。(i) bu, o はいずれも文を先行詞とする「文照応形(sentence anaphor)」としての用法を持つ、(ii) 文照応形の o は開放文(open sentence)



を指示し、文照応形の *bu* は非開放文 (*non-open sentence*) を指示する。また、「文脈指示用法」対「非文脈指示用法」という区分わけに加え、文脈指示用法をさらに非照応用法と照応用法とに分けて考える必要があることについて述べた。

最後の 3.3 節では、文脈指示用法の *o* には、「文照応形」の他に「名詞句照応形 (NP anaphor)」の用法も存在するということを指摘し、*o* の持っているそうした特徴も又、3.2 節で見た「*o* は開放文を先行詞とする文照応形である」とする (ii) の特徴から導き出すことのできる帰結の一つであるということについて論じた。

以上のように考えることによって、従来あまり述べられてこなかった繰り返しや省略を伴わない文脈指示用法の *bu, o* の分布に関して一定の統一的・原理的な説明を与えることが可能になったと考えている。又、Bastuji の問題についてもある程度の説明を与えることができたと考えている。

## 参考文献

- 飯沼英三(1995)『トルコ語基礎』ベスト社
- ギュロル、アブドゥラハマン(2009)『チュルク諸語における関係節構造—トルコ語とウイグル語を中心に』岡山大学大学院平成 21 年度博士論文
- 金水敏・岡崎友子・曹美庚(2002)「指示語の歴史的・対照言語学的研究—日本語・韓国語・トルコ語」『シリーズ言語科学 4 対照言語学』東京大学出版会、217-247
- テュレリ、オーハン(1969)『トルコ語文法・会話』丸善
- 西岡いずみ(2006)『現代チュルク諸語の指示詞の研究』九州大学大学院平成 17 年度博士論文
- 林徹(1985)「トルコ語の指示詞」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信 53』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、55-57
- 林徹(1989)「トルコ語のすすめ 3—「これ・それ・あれ」あれこれ」『言語』18-1 大修館書店、96-101
- Balpınar, Metin (2010a)「トルコ語の指示詞—“şu”系列指示詞の機能を中心に—」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第 29 号、179-198
- バルプナル、メティン(2010b)「現代トルコ語における“o”系列指示詞の特徴について—直示用法を中心に—」『東京大学言語学論集』第 30 号、東京大学文学部言語学研究室、9-26
- バルプナル、メティン(2012)「トルコ語指示詞の文脈指示用法について」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 83 号、東京外国語大学、(掲載予定)
- Banguoğlu, Tahsin (1959 [2004]) *Türkçe'nin Grameri*. Türk Dil Kurumu.
- Bastuji, Jacqueline (1976) *Les relations spatiales en turc contemporain; étude sémantique*. Paris: Éditions Klincksieck.



- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris.
- Ergin, Muharrem (2002) *Türk Dil Bilgisi*. İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Yayınları.
- Gencan, Tahir Nejat (2001) *Dilbilgisi*. Ankara: Türk Dil Kurumu.
- Göksel, Asli & Kerslake, Celia (2005) *Turkish: a comprehensive grammar*. London/New York: Routledge.
- Jansky, Herbert (1943) *Lehrbuch der Türkischen Sprache*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Kissling, Hans Joachim (1960) *Osmanisch-Türkische Grammatik*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Kornfilt, Jaklin (1997) *Turkish*. London: Routledge.
- Lewis, G. L. (1967) *Turkish grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Peters, Ludwig (1947) *Grammatik der Türkischen Sprache*. Berlin: Axel Juncker Verlag.
- Rizzi, L. (1982) “Violations of the wh-island constraint in Italian and the subjacency condition”, in L. Rizzi (1982) *Issues in Italian syntax*, Foris.
- Underhill, Robert (1976) *Turkish grammar*. Cambridge: The MIT Press.

#### 用例出典

- Altan, Ahmet (2001) *İsyân Günlerinde Aşk*. Can Yayınları.
- Kulin, Ayşe (2007) *Veda*. Everest Yayınları.
- Livaneli, Ömer (2006) *Leyla'nın Evi*. Remzi Kitabevi.
- Öğüt, T. Yılmaz (2004) *100 Diyalog*. Mitoş Boyut Yayınları.
- Pamuk, Orhan (1996) *Cevdet Bey ve Oğulları*. İletişim Yayınları.

On The Text Dependent Use of Turkish Demonstratives  
— The Usage of *bu* and *o* as Sentence Anaphor —

BALPINAR, Metin

Okayama University Humanities and Social Sciences

Abstract

In this paper, we show that there is a phenomenon of Turkish demonstratives which cannot be explained in terms of the notion of “controllable domain” (Balpınar, 2012), which is intended to determine the distribution of the text dependent use of *bu* and *o*, and argue that “whether the antecedent noun is used repeatedly or not” plays the most important role in the explanation of the phenomenon. We also point out that in addition to the distinction of text dependent use and non-text dependent use, a further distinction between anaphoric use and non-anaphoric use will be necessary in the text dependent use. Among others, the following points are argued in the text: (1) In the anaphoric use, *bu* and *o* are both used as sentence anaphor. (2) As sentence anaphor, *o* is used to refer to open sentence, while *bu* is used to refer to non-open sentence. (3) *o* not only works as sentence anaphor but also as NP anaphor. Finally, it is demonstrated that the property (3) follows from the property (2).

Keywords: Turkish, Demonstratives, Text Dependent Use, Anaphoric Use, Open Sentence

受領日 2011年6月30日

受理日 2011年11月7日